



『トクシマ・アンツァイガー』

第 16 号

徳島 1915 年 7 月 18 日

われわれにはなぜ植民地が必要か（1）

ドイツ国民の多くが植民地に賛成ではなかったし、今なお一部はそうである。帝国議会で、われわれの海外領土をめぐる大々的に舌戦がおこなわれたことを、だれもが覚えているだろう。われわれの植民地の今後の指導を任されていた有能な官吏の中には、その地位を去った者もいる。なぜなら、彼らは議会において、自分に任された領土が必要としているものについて不可欠の理解と強く要請した支持を得られなかったからである。

さて、植民地はわれわれに必要なのだろうか。この問いに答えることができるためには、根本的に異なる二種類の植民地を区別しなければならない。それは、入植植民地と、農業・商業植民地である。両者の相違は、イギリスの植民地を手がかりにすれば一番うまく説明できるだろう。というのも、イギリスの植民地世界帝国の中には、それぞれの種類についてかな

りの典型的な例が見られるからである。

入植植民地の基本的な条件は、当該地域の気候が、ヨーロッパ人の長期滞在を可能にするのみならず、子孫を増やしてゆく妨げにならないということである。

今日のイギリス領の中で明らかに入植植民地と言えるのは、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカである。アメリカの大部分の国々も、ほとんどそのような入植植民地から成立したのである。もっとも、中央アメリカと南アメリカでは、昔からいる原住民（純血の者と移住者との混血児を含む）が、まだ大きな部分を占めているが。

われわれの領土の中で、入植植民地として本当に通用するのは、ドイツ領南西アフリカしかない。

おそらく読者のだれもが知っているだろうが、19世紀だけで数百万の移民が祖国ドイツを去った。その大部分は、今日の北アメリカ合衆国の領域内に新しい故郷を見出したが、南アメリカ、オーストラリア、ロシア、ハンガリーも多くのドイツ人移民を受け入れた。このドイツ人とその子孫のほとんど全部が、時がたつにつれてドイツ的な人間ではなくなってしまった。

もしもこの移民の流れをドイツ領植民地に向けることができたら、われわれは今よりもどれほど強くなっていたらだろうか。現在のアフリカに、何百万ものドイツ人が定住しているような植民地がもしあったらと想像してみてほしい。もっとも、ドイツ領南西アフリカだけではこの課題を解決することはできなかつただろう。最近明らかになったことからすれば、この地域は数十万の白人しか養うことができないからである。

われわれの海外移住者の数は、ここ数十年間はドイツの工業の大発展のため、たしかに激減している。しかしこの数でも、彼らをドイツの国民性のもとに引きとめようとすべきだと考えるには十分な数である。そしてそれが最もうまくできるのは、ドイツの植民地においてなのである。さらに、ドイツは急速に一毎年約100万人—人口が増加しているので、このままで

は海外移住者がまた増加する時が何度もやってくるだろう。こうした可能性に備えておくのも、われわれの国家の義務である。われわれが必要としている入植地域を将来どこに見出せるかは、もちろん今はまだ言うことができない。南西アフリカは、この必要をまったく満たすことができない。この戦争が終われば、一人一人のドイツ人をドイツの国民性に繋ぎとめておきたいという願望や国民的義務が、以前にも増して強くなることは疑いない。だからわれわれは、必要な入植地域が和平によってもたらされることを願わねばならない。

これまで人口過剰になった場合、その過剰分をドイツ領でない地域に移住させてきたのだが、こうしたことをやめようとするなら、入植のための土地が必要であることは、国民のまったく自然な増加からおのずとわかることである。過去のようなことをしていたら、われわれの国民性のみならず、われわれの国民の財産も取り返しのつかないほど莫大な損失をこうむるのである。

われわれの祖国に農業・商業植民地が必要かどうかという問題に対しても、入植植民地の問題と同様、そうであると答えるのは容易である。入植植民地が、上述の説明のように、第一に過剰になった人口をわれわれの国民性に繋ぎとめておくという目的を実現するためのものであるとすれば、われわれには農業・商業植民地も必要である。それは、世界市場において現在より自立的な地位を得るためである。

この種の典型的な植民地と考えられるのは、イギリス領の中央アフリカとアジアの植民地である。南西アフリカを除くわれわれの植民地も、すべてこの種類に数え入れることができる。

つづく

慈善の贈り物

『ノルトハウゼン新聞』に載せられた詩をわれわれは最近見たが、それはわれわれのうちの幾人かが、かつてノルトハウゼンの婦人会から送られた慈善の贈り物への感謝のために、この町に送っていたものである。どうやら親切な寄贈者たちは、この感謝の表明にいたく喜んでいるらしい。もちろんわれわれは、並々ならぬ好意でいつもわれわれのことを気遣ってくれる他の寄贈者たちにも、感謝を示す必要がある。ドレンクハーン氏は、このわれわれの願いに応じて、寄贈者リストをわれわれに送ってくれた。ここにそのリストを公表しよう。氏は、寄贈者宛の手紙を、このリストで匿名になっている人々へも転送してくれる心積もりがあるそうだ。

さて、ここは最も小さい収容所のひとつではあるが、われわれは上述のことで他の収容所の戦友たちに遅れをとりたくない。そこで、われわれの感謝を表明したできるだけ優れた詩をいくらか確保するために、「歌合戦」を催すことを決定した。ここにいるすべての詩人たちに、自己の能力を世に示し、編集部に詩を提出してもらうよう求めたい。最も適切なもののいくつかは選ばれ、公表され、送られることになる。最高の作品に対する褒賞は、われわれの新聞がこの先ずっと無料で届けられることだ。デュムラー大尉殿が審査委員長を引き受けてくださった。では詩人諸君、ペガサスに鞍を置きたまえ。

ドイツからの多額の義捐金とマニラからの在日ドイツ・オーストリア戦争捕虜のための大量の大型葉巻の寄付があった。

1. ドイツ義捐金 I

金額：帝国銀行 75,100.- マルク 1 回限り

寄贈者：

1. 匿名者 30,000 マルク
2. ドイツ海軍協会 9,000 マルク

3. 銀行アジア支店連盟 25,000 マルク
 4. クルップ・フォン・ボーレン＝ハルバッハ氏 10,000 マルク
 5. 匿名者 1,100 マルク
- 合計 75,100 マルク

用途：

この義捐金から、今年の2月までに毎月一定の金額が現金で各人に支払われた。この義捐金は今年(7月)で終了する。

2. ドイツ義捐金 II

金額：この義捐金は、戦争が終わるまで毎月送金される。

寄贈者：

ベルリン郊外ジーマンスシュタットのジーマンス・シュッケルト社工場での募金

ドイツの産業金融界の人々による個人的寄付

(一回かぎりの寄付申し込み：クルップ 20,000 マルク。銀行関係者数名 25,000 マルク。ジーマンス・シュッケルト工場 10,000 マルク、など。さらに、ドイツとアメリカにいる人々からの月々の個人寄付申し込み。

用途：

a. 「義捐金 I」からのものと同様の金額の一月当たりの各人への現金配分は、この年の4月にはじまり戦争の終わりまで続く。

b. 一度かぎりの購入品と支出

夏の下着、長靴下、草履、スポーツ用品、歯の治療費など。

c. 定期的な納入品と支出

ジャム、炒った大麦(冷たい飲み物用の)、白豆、香辛料、薫香粉、粉末殺虫剤、歯の治療費、野菜・果物、その他当地で購入したほうがよいものための現金支出。

特別な要望があればお伝え願いたい。

3. ミュンヘン義捐金

金額：10,000 マルクずつの 2 回払いと 15,000 マルクの 1 回払い。

寄贈者：ミュンヘンの「東方学協会」の呼びかけで集められ、アメリカ大使館を通じて陸軍省に送金された。

用途：今年の 2 月から 4 月までのさまざまな現金支出に当てられる。

4. マニラからの葉巻の寄贈

品物：

a. 2 月、葉巻 92,500 本の寄付。一人当たり約 19 本。

b. 6 月、葉巻 95,075 本の寄付。一人当たり約 20 本。

さらに紙巻たばこ 120,000 本。一人当たり約 25 本。

寄贈者：「ドイツ海軍協会」

住所：O. ランフト気付 ドイツ商会 マニラ

私書箱 310

マニラの「ドイツ海軍協会」は、さらに今年の 1 月に 3,000 円を送ってくれたが、これは在日ドイツ人からのお金といっしょにして使われた。クローネンマイアー牧師の講演からの 126 ペソも同様である。

さらに天津の援助委員会がある。委員会は、戦争捕虜のために特別に出版された歌曲集の送付によって、再びわれわれを喜ばせてくれた。

コンサートだ！

わが読者たちには大歓迎のニュースであろうが、日曜日にわれらのオーケストラが野外コンサートでわれわれを楽しませてくれる。プログラムは以下のようなものとなっている。

- | | |
|-------------------|---------|
| 1. 『勝利の旗の下に』 行進曲 | フォン・ブロン |
| 2. 『結婚式セレナーデ』 間奏曲 | クローゼ |
| 3. 『リーゼロッテ』 ガヴオット | アダム |

4. 「どういたしまして」 ヨハン・シュトラウス
歌劇『ウィーンのカリヨストロ』からのポルカ
5. 「乙女らは天使のよう」 ジルベール
オペレッタ『40日間世界一周旅行』より
6. 『人生はやはりうるわしい』 ワルツ Ed. シュトラウス
7. 『旧友』 行進曲 タイケ

—5 時開演—

日本の農業（3）

米以外にもさまざまな穀類が栽培されている。特にいろいろな種類の大
麦、さらに小麦があるが、それほど品質はよくない。さらに、あわ・ひえ
のたぐいやとうもろこし、そばも作られている。日本で食用の植物として
重要な役割を果たしているのは豆類で、その中でも特筆すべきものは大豆
である。大豆は非常に栄養価が高く、ご飯といっしょに肉の代わりに食べ
られている。日本でもう昔から非常に重要なのは醤油である。これは、大
豆と小麦粉、塩、水を混ぜたものから作られる豆ソースである。このソー
ス—芳香のある茶色の液体—の製造は、何年もの時間を要する独特の発酵
過程を通してなされる。このソースは国中で使われている。ある旅行者は
これについて次のように記している。「豆ソースは日本人にとって米とまっ
たく同じように不可欠のものであり、たばこ・茶と同様に広く用いられて
いる。食事のときの主な調味料として、金持ちも乞食も同じようにこれを
使うが、ただ質が違っていただけである。あらゆる家庭の毎度の食事にな
くってはならないものなのだ。」

ある定番の食品[豆腐]は、それよりも希少な肉類の代用品にある程度
なっているが、これは豆の粉からできる。われわれはこれを豆チーズと呼
んでいる。これの作り方は、豆の粉を煮て、にがり（海塩製造時の母液）

を混ぜ、固形になるまで絞るのである。

塊茎植物の中では、サツマイモ、あるいは甘藷が特に栽培の対象になっている。一北の方になると、普通のジャガイモはよく育つが、サツマイモはあまり作られなくなる。アメリカの発見後、人の住むすべての土地に広まった三つの植物、つまりタバコ、トウモロコシ、ジャガイモのうち、日本人が好んで受け入れたのははじめの二つだけで、ジャガイモはそれほど好まれていない。

つづく

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第 25 問解答

1. Lh8 - d4 任意の手
2. D T か c2 × d3 で詰み

第 26 問解答

1. Kd6 -d7 Kd3 - e4
2. Tc5 - d5 Ke4 + d5
3. Df2 - d4 詰み

正解送付者：ヨーゼフ・ヴェーバー、ローデ、ライポルト

第 27 問

白：Kc1, Db2, La1, g8, Sd6, g6, Bf2

黒：Kd3, De4, f5, Lc2, Sb5, d1, Be2, f3

2 手詰め

第 28 問

白：Kd4, Db3, Le7, Sb6

黒：Kc6, Sa8, Bb7

3 手詰め



赤く塗った部分は敵国である。この地図を一目見ただけで、われわれが今、どんなに広い地域を敵と見なさなければならないか、わかるだろう。それにもかかわらず、これまでのさまざまな戦闘からすれば、われわれは皆、ドイツとその同盟諸国がこの敵の世界をやっつけるだろうと確信してよい。敵が多ければ、それだけ誉れも大きいのだ。

「エムデン」上陸隊体験記（2）

もともと船上にあるものについては何でも持ち込んでよいが、防衛力の強化になるようなものは駄目だ、という答が返ってきた。まずは衣服を補給したかった。というのも、私自身は実際ズボン1本、長靴下数足、もうかなり乏しくなっていたシャツは薄いのを1枚しか持っておらず、戦友たちはもっと不自由していたからである。しかし、港湾監督は海図だけでなく、衣服と歯ブラシの補給までも「防衛力の強化」だと言って拒絶した。許可なしに船から降りることも乗り込むことも禁じられた。私はドイツ領

事に来てもらいたいと請願した。シルト領事とボイマー兄弟がきわめて懇切な援助をしてくれた。何隻かのドイツの汽船から来たボートが横付けして、われわれと話をすることを許された。ここでやっとドイツの新聞が手に入った。もっともそれは8月の分であった。これ以降、われわれは翌年の3月まで新聞を見ることはなかった。

24時間たった28日の夕方、われわれが港から引き出されたかと思うと、すぐにサーチライトが光った。「敵の捕虜になるより中立国での抑留のほうがましだな」と私は考えた。入港前と同様海図はなく、灯火にカバーをかけて島影に隠れた。だが、サーチライトはオランダ船で、われわれに何もしなかった。それからまた2週間以上、あちこちと航海した。何日も平穏な日が続いた。天気は風いだけ雨が降ったり荒れ模様だったりした。突然一隻の船が視界に入ってきた。貨物船である。向こうもこちらをみとめ、われわれのまわりを大きく迂回した。大急ぎで戦闘準備を命じた。そのとき、われわれの将校のひとりが「チョイジング」だとわかった。向こうもすぐにドイツの国旗を掲げた。白昼だったが、われわれは照明弾を上げ、張れるかぎりの帆を張ってその船に向かっていった。「チョイジング」は、香港からシャムまで行き来している沿岸汽船である。戦争勃発時にシンガポールにいたが、バタヴィアに向かい、そこでチャーターされた。「エムデン」のための石炭を入手し、石炭に火がついたので避難のためにパダンに寄稿した。パダン港でわれわれはすでに出会っていたわけである。

今や喜びはたいへんなものだった。私は全員を甲板に上がらせた。やつらはもはや事実上ぼろきれひとつ身につけていなかった。まだ持っていた服の残りを、雨の時に着ずに大切にしていたのである。こうして自然のままの格好でわれわれはこの再会を祝ってドイツの旗に万歳を三唱した。のちに「チョイジング」の乗組員たちはわれわれにこう言った。「こりゃいたいなんだ、と思ったね。丸裸のやつらばかりが万歳と叫んでるんだから。」しかし「チョイジング」は、波の動きに逆らって船首を保つことができなかった。われわれはなお二日間、接舷を待たねばならなかった。そして12月16日、われわれはこの船に乗った。わずかの使えるものを携えて向こ

うの船に乗り込み、〔訳注：原文で数語脱落〕スクナーを曳航した。それから午後になって「アエシャ」を沈めたが、そのときは皆とても悲しい気持ちになった。この古くて立派な「アエシャ」は、6週間のあいだわれわれに忠実に仕えてくれた。航海日誌に照らし合わせて、測程器はキーリング島から1709マイル帆走したことを示していた。この船は、持ち主が言っていたのとは違って全然老朽化しておらず、内部は白塗りで乾燥していてきれいだった。私は、昔ながらの帆船の操縦ができたこの船が、とても気に入っていた。ただし、帆は古くなっていたので、しょっちゅうびりびりに裂けた。いろいろあったが・・・ともかくこの船は気高い様子で沈んでいった。われわれは船に穴をあけておいた。まず少しゆれ、それからだんだんと沈んでいき、突然ずぶずぶと音がして傾いたまま一気に沈み、姿を消した。ここ数ヶ月間で一番悲しい日だった。われわれは三度万歳と言ったが、今度キールで乗るヨットの名前は「アエシャ」にしようと、私は心に決めた。

私は「チョイジング」の船長に、挨拶がすむとすぐにこう言った。「この船はこれからどうなるかわからない。戦況によっては、沈めなければならなくなるかもしれない。」船長は、その責任を負いたがらなかった。私は、協力してもらうが、責任は自分がとろうと提案した。それでわれわれは、パダンからホデイダまで3週間のあいだ、いっしょに航海した。「チョイジング」は長さ90メートルあまりで、時速は9ノットだが、時として4ノットしか出ないこともある。もしこの船に出くわすことがなかったら、私はスマトラ島の西海岸沿いにあちこち航海して、北東モンスーンの地域まで行くつもりだった。われわれは6度ほど北に転進し、それからアデンを経由してアラビアの海岸に向かった。ここでは南東から吹いている季節風が紅海では北東から吹くので、ここに入るとジッダまでいけなかった。トルコがわが国と同盟したことをパダンで聞いていた。それで、われわれはアラビアを通過してきつとドイツまで帰れると思った。

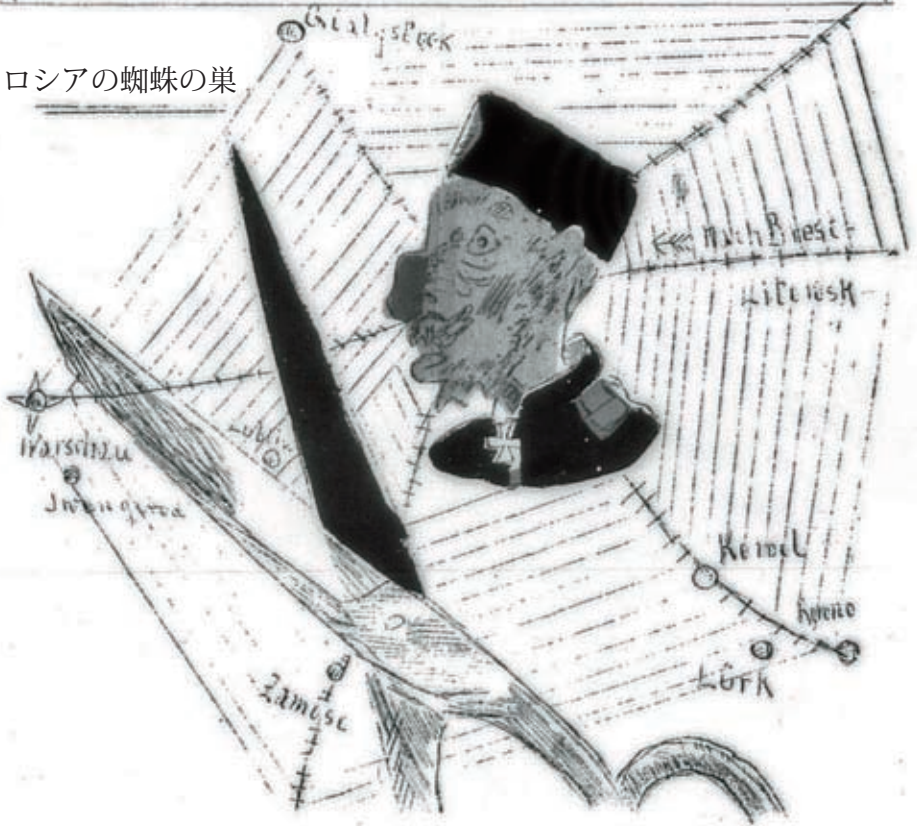
つづく



シュピーゲル (鏡) !

『トクシマ・アンツアイ
 ガー』16号 (1915年
 7月18日) ユーモア
 付録

ロシアの蜘蛛の巣



日曜日の楽しみ

夕食を食べ終わるとすぐに
音楽がとても待ち遠しくなる。
楽しい円舞のために、チェロと
クラリネットとヴァイオリンの支度だ。
踊りには拍子取りが要るので、

太鼓も欠かさすわけにはいかない。

まず短いリハー

サルをやれば

それで演奏の用意はできる。

指揮者はタクトをふり、

仕事を心得ていることが

見て取れる。

指揮台を叩き、タンタタと

口ずさむ。

楽員の注意を促し、

三まで数える。

しいっ、という声が集会所に響き

日曜舞踏会の準備はできた。





マーチの出だしでとても素敵で
肝心の催しが本格的にはじまる。
こんなふうを広間を踊り
まわるのは
なんとすばらしい楽しみだろう。
回り、行きつ戻りつしながら、
踊り手の互いの動きは見事に
合っている。
右に左に、そしてまっすぐに進み、

建物の中を縦横に楽しく踊る。
あるペアの踊りでは、美しさと
優雅さがひとつになっている。
けれども二組は大胆なスウィングで
他の踊り手たちを押し倒してしまう。
あいにくどんどん熱くなり
服はしだいに脱ぎ捨てられる。



ある者はもう泳ぐ気になっていて
海水パンツまではいていた。

だが、それでも楽音は乱れない。

ワルツが始まりとんでも

ない踊りになる。

皆はひしめき合っ

ぐるぐると踊る。

音楽は脇に追いや

れたかのようだ。

シルクハットをかぶった

整理係が

気をつけて、と言っても

もう遅い。

こんな具合だが

トランペットが

鳴って

舞踏会の終わりを

を告げると、

音楽は鳴り止み、とにかく楽しかったと

皆は満足してベッドに向かう。

